

## 内水面試験地

- 1 課題名 養殖衛生管理体制整備（内水面）
- 2 区分 国庫補助（国費：県費＝1：1）
- 3 期間 平成15年度～
- 4 担当 内水面試験地  
（藤井久之・高橋芳明・原田慈雄）
- 5 目的

本県内水面漁業の主幹であるアユ養殖業は19経営体（中間育成場を含む）で、全国第1位の生産量1,038 t（平成19年現在）となっているが、魚病が多発し経営を圧迫する大きな問題となっている。このため、防疫対策の推進と安全な養殖生産物の供給を目的として、養殖アユを中心とした魚病診断・指導、種苗導入直後の保菌検査や医薬品残留検査等を行なった。

### 6 成果の要約

#### (1) 調査方法

ア. 魚病の診断・指導：アユは養殖業者から診断を依頼されたものや防疫パトロール時に採取したものについて、外部症状や内臓の病変等を観察するとともに、寄生虫の有無を調べ、腎臓から菌分離を行なった。分離菌は抗血清又はPCRにより同定し、必要に応じて薬剤感受性を調べた。ニシキゴイ・マゴイは、販売業者・個人愛好家から診断を依頼された検体や河川・ため池でのへい死魚について、菌分離及び病勢鑑定指針によるKHVのPCR検査を行った。

イ. 保菌検査：アユ養殖業者を対象に、導入直後・放流直前の種苗の保菌検査を行なった。対象とした疾病は、冷水病、エドワジェーラ・イクタルリ感染症、ピブリオ病、エロモナス感染症である。

ウ. 医薬品残留検査：投薬歴のある出荷直前のアユを対象に平成20年8～9月にスルフィソゾール、フロルフェニコールの残留検査を行なった。スルフィソゾールは2業者から検体を採取し、1業者当り3検体（1検体は同一池から採取した5尾、以下同様）、計6検体、フロルフェニコールは1業者から4検体、残留検査を実施した。残留検査は、財団法人日本冷凍食品検査協会（関西事業所）に依頼した。

#### (2) 成果の概要

ア. 魚病の診断・指導：平成19年11月から平成20年10月までの疾病検査はアユでは冷水病8件・ピブリオ病2件・ボケ病1件・トリコディナ1件・その他8件、計20件であり、依然冷水病の占める割合が40%と高く、種苗導入直後の11月から出荷盛期の7月まで発生している。ピブリオ病は海産種苗導入直後の3月に発生している（資料1）。分離された冷水病菌はスルフィソゾール、フロルフェニコールに、ピブリオ病菌（血清型A）はオキシリン酸、フロルフェニコール、スル

ファモノメトキシシン及びオルメトプリム配合剤にいずれも高い感受性を示した（資料2）。ニシキゴイでは白点病1件、ミズカビ1件、その他1件、計3件であった。マゴイではチョウ症が1件であった。KHV検査はニシキゴイで3件、マゴイ3件であったが、いずれも陰性であった（資料1）。

イ. 保菌検査：平成19年11月から平成20年10月に10件について保菌検査を実施したところ、冷水病が1件発生した。アユの新しい細菌感染症で蔓延が懸念されているエドワジェーラ・イクタルリ感染症は確認されなかった。（資料1）。

ウ. 医薬品残留検査：スルフィソゾール6検体、フロルフェニコール4検体について実施したが、いずれも残留は認められなかった。

### 7 成果の取り扱い

#### (1) 成果の普及

防疫パトロール時に、適宜養殖業者等に指導・普及した。

#### (2) 成果の発表

平成20年度県内養殖衛生対策会議